

## 第 41 回全国中学校国語教育研究会に参加して

11 月 15 日、16 日と全国中学校国語教育研究大会が熊本市で開催されました。参加者は二日間で 900 人を超えたということです。

熊本県内の中学校の先生方はこの日に向けて三年前から準備委員会を開き、私はアドバイザーとして関わることとなりました。全国では、現在、急速に実践と理論の統合を目指した地域と大学とのコラボレーションによる研究が推進されています。この全国中学校国語教育研究会についても神奈川大会、群馬大会とそれぞれの地域の現場の先生方と大学国語教育研究者とのコラボレーションによる開催でした。こうした状況の中で、本大会の事務局が私をアドバイザーとして迎えたいという希望を出して下さったと聞いています。大会後、全国中学校国語教育研究協議会会長の吉田和夫先生（東京・四谷中学校長）が、実践現場と大学国語教育研究者とのコラボレーションが見事に成功した取り組みの先行事例として意味があるというようなこととお話しになっていました。

この三年間は私にとっても大きな学びとなるものでした。これまで熊本の国語教育人として先輩の諸先生方に育てていただいたその恩を、生徒に生きて働く学力をつけることで返したいという事務局の先生方と、その熱い思いを受け止め、熊本から中学校の国語教育を変えるのだという思いで授業に取り組んだそれぞれの部会の部会長さんの思い、そして、それを受け止めてこれからの授業改革に授業者として取り組んだ先生方の思いが一つになって、これからの授業の方向性を熊本から全国に発信することができました。

振り返ってみると、それまでの研究部会や総会などでそれぞれの部会から実践が報告され、私が助言するという場が何度もありました。そんなとき、それぞれの先生方が自信を持ち、次に歩んでいけるようにという配慮から、本当に言いたいことをオブラートに包んだような発言になることが多々ありました。すると、部会長さんたちが、「皆さんの前では先生の発言も遠慮がちになってしまうと思います。しかし、私たちが知りたいことは本当にこうした授業でいいのか、他に考えるべきことはないのか。学習者の側からの授業のありかたについて、遠慮なく忌憚のない意見を先生からいただきたいと思います。みんなの前で厳しく言っていただいて構いません。それが勉強です。」という言葉が直接いただきました。この研究会を形だけに終わらせたくないという先生方の真剣な姿勢に、熊本県の中学校国語教育の未来を頼もしく思いました。中には、直接研究室に訪ねて来て助言を求められることもありました。生徒のためという一心で取り組む研究は強いと改めて思いました。そして、先生方の授業力を高めるのは本気の議論なのだと改めて思いました。

この三年間の間に先生方の授業が変わっていきました。納得できない場合には、部会長さんの提案でもう一度やり直そう、考え直そうということになりました。研究会での発言も次第に厳しい発言が飛び交うようになっていきました。そんな言葉を受け止めることのできない授業者の先生もはじめはいました。しかし、そうした先生が他の先生方の本気の発言に出会い、自分を振り返る反省的实践家として、学びを改革していったことが大変す

ばらしいことであったと思います。実践知として自分の中に強固に作り上げられたものを仲間からの批評や理論学習によって変容させていくことは、ある時は自己を否定するような営みであり、大変苦しいことなのだと思います。しかし、今となっては、他者の考え方や理論に学ぶことができたからこそ授業が変わったのだという実感が得られたはずです。先生方に大きな自信とこれからの授業への期待をもたらす経験であったことでしょう。

とりわけ、公開授業で中学校3年生の「故郷」（魯迅）を実践し、全国の先生方に対話型授業のすばらしさを披露された長元尚子先生の懇親会の言葉が忘れられません。

「河野先生との出会いが私の授業を変えてくれました。対話を中核にしながら授業を創造することによって、生徒が変わりました。生徒が自分自身の言葉で表現することの喜びを知りました。そして、自画自賛ですが、私の授業は変わり続けています。授業が面白くて仕方ありません。私の小さな疑問や質問のために夜遅く駆けつけていってもそれを聞いてくださった先生に感謝します。」

私には過分のお言葉ですが、文学部出身の先生にとって、学習理論との出会いは衝撃的だったそうです。はじめは十分に理解できず、理解できないから授業もうまくいかない。しかし、私が語る学習理論に目標と希望を見出し、なんとかそういう授業を実現したいと考えて「国語教育湧水の会」にも足を運び、小学校の授業からも学ばれていきました。

実際には、私自身が長元先生をはじめとする多くの先生方の授業から、これからはやはり実践と理論の統合は重要であり、その実現のために国語教育研究者として努力していかなければならないという決意を新たにすることができました。実践と理論の統合は大変難しいことです。しかし、様々な問題状況を抱える実践現場に向けて、実践現場の先生方と共にこの道を歩んでいかなければという思いを再確認できたという意味でも、この三年間は私にとってかけがえのないものだったと思います。

新学習指導要領は機能的・実用的な知識・技能の育成を目指しています。これまでの伝授型授業から対話型授業への転換は中学校の先生方にとって大きな学びのパラダイムの転換となるものです。そうした授業を学習者の側から出発し、基礎的・基本的な知識・技能の育成を図ることが求められます。そのために、まず先生方と一緒に始めたのは、それぞれの教材や単元で教えるべき知識・技能の洗い出しです。この作業が一年、二年、三年と続くことによって、中学校三年間を通して何を教えるべきかという見通しが見えてきました。この知識・技能の洗い出しを通して、「文学的文章で教えるべき知識・技能とは何か？」「話すこと・聞くことの授業で教えるべき知識・技能とは何か？」ということが明らかになりました。さらに、こうした知識・技能を単なる「学校知」に閉じ込めないため、学習者の既有知識・生活経験と結びつけながら、生き生きと意欲的に学んでいくこと、そしてそれらの知識・技能の有用性を実感させることが大きな課題になります。そこで、私の提唱するメタ認知の内面化理論、鶴田清司氏の国語教育理論、本校でも取り入れている三角ロジックの考え方、さらに社会文化的アプローチにおける共同行為としての学習理論などを紹介していきました。

中学校の先生方は、義務教育最終段階として基礎的・基本的な知識・技能の「習得」「活用」をなんとしても果たさなければという思いを強くお持ちでした。それで、こうした理論学習にも積極的に取り組まれました。

こうして、本大会での研究の視点が、①知識・技能の明確化、②導入の工夫、③学習の見通し・振り返りの三点として設定されました。そして、その内実を明らかにするために、理論学習のみならず、具体的な授業レベルでの取り組みを知ることはできないかという依頼が事務局からきました。そこで、学生たちと共に、実践提案を、演じながら行うという新しい形での講演・提案を行いました。さらに、事務局の先生方や授業者の先生方が「国語教育湧水の会」に何度も足を運び、中学校のみならず小学校の実践からも学んでいったのです。熊本大学主催の「キックオフシンポジウム」(熊本市教育委員会共催、熊本県教育委員会後援)にも足を運んでくださいました。

そして、部会ごとに実践を積み重ねながら、どの領域でも思考・判断・表現する言語活動を支える力として「根拠—理由づけ—主張」という共通のツールを用いて、生徒の具体的な「理由付け」の質を高める授業の工夫などの提案を行ってきました。鶴田清司氏も事務局の依頼で講演に駆けつけてくれました。その結果、大会紀要の中に、『豊かに言語生活をいとなむ学習者』には、課題に対して自ら対処し、さらに追究していくことができる力を期待したい。具体的には、知識・技能を運用し様々な課題を自ら対処していく力、さらにより良い対処の仕方や結論を導き出すことのできる力などである。その際、資料1のような三角ロジックの考え方を利用したい。課題に対する主張が、どの根拠(事実やデータ)から理由付けされたものなのかを明らかにさせることで課題解決の過程を客観的かつ論理的に振り返り、問題の所在も明らかにすることができると思ったからである。」という文言が入り、全領域に共通する考え方として位置づけられ、実践が展開されました。

このことが全国の先生方に大変参考となるものと受け止められました。今回の実践研究が全国へと波及していき、新たな実践が生み出されることが教育の進展のために重要です。大会を終えて、事務局の先生方から送ってくださった言葉。

先日の全国大会では、大変お世話になりました。鼎談等でも、たくさんのフォローをいただき、研究に厚みをつけていただきました。他県の事務局からは、「河野先生がお近くにいらっしゃって、いいね。」という話がありました。

行き届かず、ご迷惑をおかけした点多々ございますが、残務が落ち着きましたら、湧水の会へもまた参加させていただきたいと思います。本当にありがとうございました。

教育の世界は、まだ実践家と研究者がお互いに見え合い、よい関係を築くことができていない面があります。これは不毛なことだと思います。児童・生徒のよりよい学びを創りだし、生きる力を育むためには、実践家と研究者の真のコラボレーションが必要であることを本研究大会への道のりを経て再認識させられて、私のほうこそ本当に多くのことを

学ばせていただいたと思います。

教育への見果てぬ夢を志のある先生方と共に歩んでいきたいと思います。児童・生徒のために。

河野順子